
へた歴史！

冬空 奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタ歴史！

【Nコード】

N5377J

【作者名】

冬空 奏

【あらすじ】

勝手に、歴史を改造していく小説である……。
くだくだなのは仕様である。

第1代目：「不老不死の薬を訪ねて、三千里。」（前書き）

はいい・・・小説とか更新しない人でごめんなさい（汗）

始皇帝「次からはちゃんとしないと、万里の長城の労働につかせるぞ。」

うぐ・・・それはやだからちゃんとします・・・。

えーと、歴史をそのままで維持したりしたい方にはあんまりオススメできません（汗）

ダメな方は退場を・・・。

第1代目：「不老不死の薬を訪ねて、三千里。」

・・・タイトルだけではわかんないと思うので説明を少々。
この小説は、日本史と世界史をぐだぐだにしています！
この時点で、ムリという方は・・・早めにご退場を・・・。

「もうやだ・・・。不老不死の薬はまだ見つかってないのか？」
「残念ながら、見つかったという報告は・・・。」

今回は、秦の始皇帝のお話である。

えーと、始皇帝が変な事に走らない様に召使的なあれも登場。

「不老不死なんて・・・夢のまた夢だったよ・・・。」

目を下に向けて、始皇帝が言う。
今にも引きこもりそうな感じた。

「だ、大丈夫ですよ！きっと、見つかりますから！」

必死に励まそうとする召使。

・・・召使って一々面倒だし・・・田中にしよう。

「ちょっと待てー！！田中じゃねーよー！！」

無視して、田中に任命。

どうやら、状況を言つと・・・始皇帝が僕達しもべに不老不死の薬を探させてるそうだ。

田中は万が一のために、始皇帝の側に置かれてるそうな。

「もういいや・・・。不老不死とか諦める！」

「いや、諦めないで下さい！Never give upです！」

田中、英語を乱用。

読者の皆様は、何故始皇帝の側に田中が置かれたかが分かったと思う。

とりあえず、超ネガティブ思考の始皇帝だった・・・。

「・・・早く薬位とつてこようよ・・・。」

「いや・・・、まだ派遣して2日しかたつてませんから・・・10分置きに、どうなったか聞かないで下さい・・・。」

もう、目が死んでる始皇帝。

流石に、田中も呆れてきた様子・・・。

「もういいや・・・。その辺のコケとか食べとくよ・・・。」

「いや、そんなの食べないで下さい！！！」

本当に諦めムードの始皇帝。

田中は、始皇帝の危ない言動などには常に突っ込みを入れる。

「水素、ヘリウム、リチウム、ベリリウム・・・何だっけ？」

「・・・今更元素の暗記なんてしないで下さい・・・。気が遠くなつてきます・・・。」

実は、元素を^{イットリウム}Yと水銀しか覚えてない始皇帝であつた。
本当に呆れている田中であつた……。

「この人の世話してるなら……家で寝てる方がマシだ……。」
「何か言つたか？」
「別に……。」

もう、何もかもに絶望していた田中だつた……。
すると……その時だつた。

「始皇帝様……これが、例のクスリだそうですよ……。」
「なんだ……この色は……^{コバルト}Coか？」
「絶対ちげーよ!!」

しっかりと、突っ込みを入れる田中だつた。
実際の話を知ってる方はもうオチにお気づきだろう……。

「まあ、いいや……。いただきま……。臭っ！」
「……え?……うえええ……。アンモニアの匂いにする……。」
「

ついでに、この時代に元素があつたはずはないであろう……。たぶん。

これはあくまでも、多少?捏造である。

「うぐぐぐ……。アンモニアは流石にムリだ……。」
「そうですね……。」

ついでだが、塩化アンモニウムに塩酸?を加えるとアンモニアが発

生するらしい。

硫酸だったかもしれないが・・・。

「もういいや・・・。色的に、C Oだし・・・。」

「いや、違うから・・・。」

田中はもう死にそうな位突っ込みを入れたようだ。
全体的に死んでいる・・・。

「いただきます・・・。むぐっ！」

こうして、飲んだ瞬間始皇帝は息を引き取るのであった・・・。
実際にアンモニアとかはこんな事にはなりません。悪魔でそこら
も、捏造です。

こうして、始皇帝が飲んだのは水銀でした。

「・・・計画通り。」

ラ・トかお前は。

第1代目：「不老不死の薬を訪ねて、三千里。」（後書き）

なんで、理科混ぜたのかな・・・（汗）

始皇帝「C oとH eとYでこの世は上手く・・・」
田中「いかねーから!!!」

それでは、次回へ・・・。
さよなら！

第2代目：「銃は、種子島産！」（前書き）

いやー、今回もなかなか疲れた・・・。

始皇帝「もっと、更新しろよ。」

すみません・・・。

第2代目：「銃は、種子島産！」

時は戦国時代・・・。

かの有名な3人が活躍する時代である。

今回は、そんな戦国時代をのぞいてみよう・・・。

「ふあああ・・・暇だな。」

いきなり大あくびで登場したのは、有名な織田信長である。
やっぱり、武将とくると登場も余裕である。

「なんか面白い事ないのか・・・？」

「信長様ー！」

退屈してる信長の所にやってきたのは、足軽である。
名前が特にないので、佐藤にしておこうか。

「どうした、佐藤・・・何か面白い事でもあったか？」

「えーとですね、新しい武器が手に入りました！」

声のトーンを高くして佐藤が言う。

信長は、その言葉に一瞬で反応する。

「おー？ど、どんな武器っ！？」

「えーと、鉄砲って武器らしいですよ。」

そういつて、佐藤は鉄砲を差し出す。
一応、まだまだあるその一部である。

「ほう・・・どうやって、使うのだろうか・・・。」
「えーと、あの人に聞いてください。」

佐藤が指差した所に居たのは、明らかどっかの外国人である。
それでも、信長は外国人に聞きに行く。

「これは、どうやって使うんだ？」
「コレハデスネ、コウヤツテツカイマース。」

カタコトの外国人が鉄砲を持って、使う。
パーン！という銃声とともに、佐藤に弾が当たる。

「ほう・・・ありがとうな。」

そういつて、信長は佐藤の方へ向かう。
佐藤は倒れこんでいる。

「よし、これで武田の騎馬軍に攻め込めるぞ！いくぞ、佐藤！」
「ちょ・・・処置もなしですか・・・。」

超機嫌な信長に、のそのそとお腹を抱えながらついていく佐藤。
これだから、この時代は大変である。
佐藤は心の中で叫んだ。

・・・処置はしてほしいんですけど・・・。

なぐし〜の

「これで、武田に勝てる！」

そんなことを信長が言っていたら、ほら貝が吹かれた。
合戦の開始である。

「銃撃だー！撃てー！」

「ちょ！？何、この弾！？」

信長の指令で足軽達が、騎馬隊に向かって鉄砲を撃つ。
騎馬隊は次々と倒れていく。

「仕方ない！わしが出よう！」

そういつて、武田が鉄砲隊に突撃。
無論、銃弾が飛んでくる。
その時だ・・・！

「ヤンマーニヤンマーニヤンマーニヤイヤ！」

「・・・セクスイ。」

「やってる場合ですか！信長様！」

というわけで、武田と織田のヤンマーニ合戦は佐藤によって打ち消される。

そして、武田は新たな手に出た！

「エフン・・・撃て！」

信長がそういった時、武田の第二段が炸裂する。

「ふふっ・・・武田の首が見える・・・。」

「残念！それはわしのおいな」

「まてやごるあああ！！！！」

この佐藤の一殴りで、長篠の戦は終わった。

武田は、その場に倒れた。

馬は、この後信長の城で家畜として飼ったようだ。

「え・・・うそ・・・。」

「・・・これは、歴史の教科書とは異なってるからな・・・！」

「分かってます！信長様！」

これで、今回の長篠の戦は終わったのである。

佐藤・・・ぐっじょぶ！

そして、武田・・・あんなネタで終わったのは悲しすぎる・・・。

「それでは、次回に期待ですね。」

そのとおり！佐藤は分かっているな・・・。

「じゃあ、次回！」

信長サン・・・なんで、こっちに銃を・・・。
パン！

この後、悲鳴が聞こえたのは言うまでもない。

THE END

第2代目：「銃は、種子島産！」（後書き）

いやー、本当にダメだな・・・。

信長「本当にな。」

武田はかわいそうですかね（汗）

第3代目：「のぶつくんと一向一揆」(前書き)

さて、今回もぐちゃぐちゃです・・・。

佐藤「2割ほど実際の日本史です」

2割もないかも・・・ほぼアレだし。

佐藤「それは言っちゃだめです！」

第3代目：「のぶつくんと一向一揆」

さて、今回はどこら辺に行くのか・・・。

知らない歴史を旅してみたい。

歴史を面白おかしく学びたい。

そんな人のための小説。

ヘタ歴史の始まりでございます！

「・・・一揆とか何？死ねばいいのに」

「ちょ！？そういう発言はやめましょう！」

さて、今回は織田信長さんである。

これは、一向一揆に本当にあきれた信長と、長篠の戦で大活躍した佐藤である。

ちなみに、本当の長篠で佐藤が居たかは、定かではない。
多分、居なかっただろうと思う。

「何か対策とか考えましようよ！ね？」

「・・・いや、キリスト教の保護をしているはずなんだがな・・・」

「・・・立ち向かいましようよ！」

「面倒なんだよ・・・あれ、ゴキブリ並の生命力だし、蚊位湧くし・・・」

・・・だめだこいつ、早くなんとかしないと。

とりあえず、一向一揆が城に攻めてきたみたいなので、信長は渋々立ち向かうこととなった。

相手はたかが農民。

しかし、農民というのは以外に強くて、佐藤のパンチ一発では死なない様子。

無論、この頃の農民や武士は、信長の対策のために、「ヤンマー」を習得（この小説内のみ）。

そして、他の軍も鉄砲を買っている。

農民には、渡っていないのがせめてもの救いである。

「いつき！いつき！いつき！」

「うるせーもん、農民うるさいからいやなんだよ・・・」

「ほら、立ち向かいますよ！」

此処で、合戦は本気モード。

最初から本気でないと、一向一揆には勝てないのだ。

一向一揆等の一揆には、最初から本気を出さないと勝てないのだ。ちなみに、武田軍にはパンチ一発で勝ててしまうことが判明。

「いくべー！憎き信長を殺すだ！」

「だから、うるせーよ・・・静かにしてくれ・・・」

「いつき！いつき！いつき！いつき！」

「うるせーって言うてんだろーが！..」

そう言つて、信長は一向一揆の集団にある黒いものを投げた。信長はなぜか、ピンを持っている。

そして、その黒いものは一揆の集団に転がっていき・・・。
無論、その後爆発した。

「信長様！！この時代の日本に手榴弾はありません！」

「いや、あの外国人に貰ったんだよ・・・」

信長の指の先には、迷彩柄の服を着た男が一人立っていた。
こちらに敬礼をしている。

男の額には、長いバンダナが巻かれており、髭が少しだけある。

「・・・つて、ス。ークじゃねえか!!」

「あ、そうなの。あの人、ス。ークさんなんだ」

どうやってタイムスリップしたのだろうか・・・。

とにかく、これで一向一揆から城と信長は救われたのであった。

そして、この一向一揆は中心核が起こしたものだっらしく、これ以降一揆は起きなかった・・・。

こうして、信長は一揆に負けずに、城を守りきった。

一揆が来るたびに、いつも手榴弾を投げたり、マシンガンを乱射したそうな・・・。

これで、信長にはむかうものは一人もいなくなったようだ・・・。

「いや、なっていないからね!実際の日本史だったら、こんなことにならないからね!」

あんたも居ません。

それでは、次回へ・・・。

「書くことなくなったからって逃げんな!!」

THE END

第3代目：「のぶつくんと一向一揆」（後書き）

この物語はフィクションであり、実在する人物には一切関係ございません。

信長「そうだな、こんな日本史は勉強したくないな・・・」

あながち面白かったりするかもよ？

佐藤「逆にこええよ！」

じゃあ、次回は誰にしようかな・・・。

佐藤「有名なところにしてくださいね？」

おけー、がんばってみるよー

第4代目：「修行、独り言、寺にて。」（前書き）

さて、今回もとっても酷い出来上がりです。

始皇帝「こんな小説でも、読んでくれる人居るんだなあ・・・」

う、うるさいなあ！

でもやっぱり、読者の皆様には感謝の気持ちで一杯です。
更新が遅くてもしつかりと読んでくださっている・・・。
そんな読者様方が大好きでございますううう！！

信長「キモい！作者を討ち取れ！」

ちよ！？足輕軍団が・・・。

ギイヤアアアアア！！

始皇帝「コホン・・・それでは、今回も楽しんでいてくれないか？」

第4代目：「修行、独り言、寺にて。」

日蓮宗、一向宗、時宗、曹洞宗、臨済宗、浄土宗・・・。

このように、たくさん宗派が日本には存在する。

さて、今回は最初にあげた宗派より前の宗派の物語。

真言宗と天台宗のお話。

つまり、空海と最澄の時代のお話である。

「なんかさ、あれじゃね？空海は色々あるけど、俺ってあんまり特徴無くな？」

いきなり、最澄がそう呟いた。

確かに、教科書や先生の話等だと、空海の話は多いが、最澄の話はあまり聞かない気がする。

「もう、一人呟きのコーナーみたいになってるけどさあ、空海はことわざにも出てるじゃん？」

「しかも、ウ。キペディアの内容の濃さが全然違うし」

最澄がふてくされたように、呟いていく。

正直な話、本当にそのとおりである気がする。

空海は「弘法も筆のあやまり」ということわざがあるのだが、最澄にはない。

風信帖と同様、最澄にも空海宛に書いた手紙があるそうだ。

「しかも、あれでしょ？高野豆腐の発祥の地か何かでしょ、高野山って」

「ほら、何も無いじゃん！！寺に関する特徴一つないじゃん！！惨めなやつだけじゃん！」

確かに、惨めではあるが最澄の言うとおりであるかもしれない。

本当に特徴が無くて、正直な所授業するまでは、この人の存在を知らなかったのである。

空海は知っていたのだが、最澄については全く知らなかった。

宗派の名前としては出てくるのだが、作った人は？と聞かれると少し困る人物である。

「大体、空海はどこかで温泉沸いたって言うじゃん！杖が何かでついたら！」

「俺はないよ！！銅像が何か位しかねえよ！！多分！」

本当にそうなのかもしれない、と考え込んでしまう位特徴がないのだ。

ちなみに、最澄の書いた手紙は国宝とされている。

「しかも、寺は焼かれるしよおお！！！」

織田信長に、延暦寺は焼き討ちされてしまうのである。

正直、近代化しすぎている最澄ではあるが、そこは気にしない方向で行こう。

なんだか、いたたまれない人物である。

「あれなんだよ、嬉しかったことが覚え方だけなんだよ！」

「天台宗・最澄だから、「天才・最澄」って覚え方があるんだよ！でも、それしかねえよ！」

せめてでも、嬉しいことがとても小さい。

正直な所、手紙が国宝になったという話もある。
どちらかといえば、そっちのが嬉しい気がする。

念のため言っておくが、作者も最澄については実によく知らない。

「で、俺の書いた手紙は「久隔帖」っていうんだけど、まったく一発変換できねえんだよ！」

「でもな、「風信帖」は風の一字の変換はできるんだよ！久隔帖は全然できねえの！」

ちなみに、これは全て作者のパソコン変換調べである。

一発変換を行うと、「風心情」「嗅覚上」となる。

使っているソフト、パソコンによる個人差は気にしない作者調べである。

「もうやだ！全体的にやだこんちくしょおお！！！」

そして、この叫びの後に弟子にまで「うっさい！！黙って修行しろ！」と言われてしまった……。

その言葉に最澄は深く傷ついて、修行を再開したが、この一日は一切弟子に口を聞かなかったそう。

今回も今回で全くためにならない歴史の勉強であった。

THE END

第4代目：「修行、独り言、寺にて。」（後書き）

ちなみに、wikiの話はガチなんです（笑）

最澄「本当に何のとりえもないじゃねえか・・・」

本当にねー・・・。

でも、一応は天台宗なんて大きい宗教団体になったじゃん。

最澄「絶対、禅宗のが人気だって・・・」

・・・それでは、次回♪

第5代目：「兼好法師と現代化」（前書き）

いやはや、やっと更新でございます。

始皇帝「頑張りが足りないんだよなあ」

砂糖「そうなんですよn…って、おい！佐藤だよ！」

いや、変換ミスったしそれでいいかなあって。

ス。ーク「待たせたな」

居たのか（汗）

誰もお前を待つてなんかいないのだが…（汗）

とにかく、今回も楽しんでいてくださいなっ。

第5代目：「兼好法師と現代化」

「そこはかとなく書き作りなう…と」

さて、今回は鎌倉時代のあの人に注目したいと思う。

あやしうこそものぐるおしけれになってしまふ吉田兼好さん物語である…。

今回は、「歴史？知るかなもん」という人にもわかる？ように、現代的なものにしようと思う。

題して、「もし、吉田兼好が現代のインターネットをしていたら」である。

ドラマネに似てる気もするが、一切関係ない。

「うし、今日も随筆を更新するかあ…暇だし」

そう言つて兼好は、ブックマークから随筆管理画面を開く。

今回の話では、随筆Ⅱブログと思って頂きたい。

「ある人、弓射ることを習ふに…ってタイトルにするかな」

兼好はプログラミングでもやっているかのような手つきで、キーボードを叩いている。

鎌倉時代の人でも、慣れてくればきつと出来ることであろう…。

ちなみに、「ある人、弓射ることを習ふに」は実際に徒然草の第9段で登場している。

「…懈怠の心、自ら知らずといへども、師これを知る。この戒め、

万事にわたるべし…と」

作者の都合上、中略させていただく。

中略した部分を、今から現代文で書いてみようと思う。

ある人が、弓を射ることを習うときに、二本の矢を手にした的に向かった

師匠の言うには、「初心者は、二つの矢を持ってはならない」

「次の矢をあてにして、初めの矢を射るときに油断が生じるものだ」

「毎回ただ、命中するかどうか迷わず、この一本の矢で必ず当てようと思え」と言う。

たった二つの矢なのに、師匠の前で、一つをおろそかにしようと思うだろうか。

…という部分が中略された部分である。

詳しく知りたい場合は、徒然草を読んでいただきたい。

「お、早速コメントが！どれどれ…」

「これ、この戒めに感動しにけり…。ほう、それは良かった…」

新しい戒めを載せた後は、更新をして偶然コメントを発見したようだ。

そのコメントに興奮するべく、兼好はコメントを読んだ。

ちなみに、一つのコメントを考えるのに3日かかったのは言うまでも無い。

「あれだね、やっぱり伝わるってのはいいね」

「…その次のコメント、荒らしだったけど」

筆のかわりにマウスを持ちながら、兼好は言った。

そして、荒らしを信じられないほどのスピードで削除した。
ある意味、天才なのかもしれない。

「…コイツは便利だなあ。すぐに何でもできるじゃないか！」

そう言って兼好は、自分の前のパソコンを撫でながら言った。
そして、ワイヤレスのキーボードとマウスを元の位置に戻し、その
まま兼好はこう言ったそう。

「…はあ、何やってるんだろう。私…」

そして、そう言った兼好はパソコンの電源を切り、そのまま自分の
庭へ向かった。

庭に来て、そのまま縁側に座る。

そのまま兼好は明日の随筆のネタを探していくのだった…。
少し終わりが速かったのは、作者の都合である…。

THE END…

第5代目：「兼好法師と現代化」（後書き）

始皇帝「なあ、台詞一個で3日って本当か？」

本当でございます（汗）

古文の文法とか、古語とか知らなかったからねー（汗）

佐藤「それでよく随筆をテーマにしましたね（汗）」

いやー、テスト勉強の時にさ「これ、ブログみたいなもんじゃね？」
って浮かんだからねー。
それでやってみたわけ。

兼好「…この小説にモットーとかってあるのか？」

うーんとね、「歴史に興味の無い方に歴史に少しでも興味を持って欲しい！」っていう思いがあるよ（笑）

始皇帝「…一生ないな」

うぐ…それではーっ（汗）

佐藤「あつ！逃げやがった！」

信長「えいつ（手榴弾を投げる）」

ギィヤアアア！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5377j/>

ヘタ歴史！

2011年1月4日18時37分発行